

目次

鳩 A	3
電話	10
洗濯機	19
かくれんぼ	28
月食	37
水族館	44
鳩 B	48

鳩A

登場するもの：僕

彼女

僕 彼女は手品師だった。

いつも黒いチョッキを着て、大きな帽子を頭にちよこんとのせていた。

毎週日曜日の公園で、ステッキを花に変えたり帽子から鳩を出したりして

拍手を浴びていた。彼女は人気者だった。

けれどもその日、僕が彼女を見かけたのはいつもの公園ではなく、

町はずれの川原だった。

彼女 あなた、いつも公園に来てる？

僕 …うん。

彼女 知ってるわ。いつもいちばん前で見てるでしょ。

僕 ……

彼女 手品が好きなの？

僕 ……うん。特に帽子から鳩を出すやつが。

彼女 そう。…あれはね、いちばん難しいの。(得意げに)

僕 ……そうだろうね。

彼女 どうしてわかるの？

僕 だって、全然仕掛けがわからないから。

彼女 仕掛けなんかないわよ。

僕 ?

彼女 仕掛けのない手品がいちばんおもしろいよ。

僕 仕掛けのない手品なんておもしろいよ。

彼女 ふふん。(馬鹿にしたように笑う)

僕 なんだよ。

彼女 いいえ。

僕 なんだよ…

彼女 ずいぶん練習したの。それでもなかなかできなかつたの。

僕 ……ふうん。(狐につままれたような)

彼女 何度も何度も練習したのよ。それでもなかなかできるようにならなかつたの。

それがどういふことだかわかる？

僕 ……わからない。



僕 …… 違うことってなに？  
彼女 たとえば ……、帽子から鳩を出したりしないようなことよ。  
僕 ……

僕は混乱していた。

僕 どうして？嫌になったの？

彼女 あなたは男の子だからわからないと思うけど。女の子にはいろいろと事情があるのよ。

僕 ……？

彼女 いつまでも、帽子から鳩を出してる訳にはいかないの。

僕 ……

僕 突然、強い風が吹いてきた。

彼女はあわてて頭をおさえたけれど、間に合わなかった。

ぶかぶかの帽子はあっという間に吹き飛ばされて、川の面を滑っていった。帽子が川下へ運ばれていくのを、彼女も僕も、黙って見ていた。

大きな夕日が川の面でゆらゆらと揺れていた。  
こっちのほうはいつまでも流されることなく同じ場所にとどまっていた。

それから僕らは友達になった。

彼女はもう二度と、公園で手品をすることはなかった。

そんなことがあったことすら、忘れてしまったかのようだった。

その代わりに。たしかにもっと別のいろんなことをやりはじめた。

できるようになるのに長い時間かかることもあったけれど、

それでも時期が来るとすっかり止めて、やがてまた別のことをやりはじめた。

いつしかそこには僕も加わるようになった。

僕らは一緒に、いろんなことを、はじめたり、やめたりするようになった。

気がつくとお互いがいつも、誰よりも近くにいた。

……僕はそう思っていた。

### 教会の鐘の音

僕 もう何十年前も前のあの夕日のことを、僕は思いだしていた。

どこまでがほんとうに僕が見た風景だったのか。  
遠い昔に、僕が空想の中で勝手に作ってしまった偽物の風景なのかもしれない。  
その証拠に。あれから僕らは二度と鳩の話をしなかった。  
だけど僕は確かにいつかどこかで彼女と出会い、それから先の長い時間を一緒に  
過ごした。

小さな教会で、今日、彼女の葬式が行われていた。  
参列者は少なく、こじんまりとした身内だけの式だった。  
大きな、重そうな棺（ひつぎ）のふたがゆっくりと開けられた。  
次の瞬間、中からたくさんの白い鳩がいっせいに飛び立ち、  
無数の白い羽が空へ舞った。  
あとからあとからとぎれることなく出てくる鳩の群を前に、  
長い間立ちつくしていた。

彼女 「できるようになったのよ。でも・・・」

僕 遠い、記憶の中の声に。僕はふと我に返った。

### 電話

登場するもの： 夫

妻

早朝。ぶるるるる。電話が鳴る。

夫 （電話の音で目を覚ます。慌てて起き出して受話器を取る。慌てるのでうまく  
とれなくてばたばたして…それでもなんとか…） …あ…は…はい。

妻 ……おはようございます。

夫 おは…は…？ え？ おまえ、今、どこに…

妻 台所。

夫 どここの？

妻 うちの。

夫 は？ え…あれ？ 俺は…

妻 寝室。

夫 どここの？

妻 うちの。

短編集 3

夫 …。(起きぬけの頭の中を整理している)

夫 いつ、帰ってきたんだよ…

妻 …2時間くらい前。

夫 今何時？

妻 7時半。

夫 大丈夫か？

妻 何が？

夫 何がって…

妻 落ち着いて普通に話してるでしょ。

夫 …うん。

妻 声も大きくないでしょ。

夫 …うん。

妻 異常な言動も見られないでしょ。

夫 …うん。いや、そうじゃなくて………無事なのか？！

妻 無事。

夫 そうか……。よかった。いや…違う。日曜日の7時半にうちの台所からうちの寝室

へ電話がかかって来た。これは普通のことなのか。充分異常じゃないか。

妻 だから、それを今から説明しようとしてるんじゃない。

夫 だいたい、何だよ。夜中に寝間着につっかけて飛び出して…信じられないよ。心配するだろ。

妻 寝間着じゃない。スウェット。

夫 一緒だよ。

妻 違うじゃない。

夫 …どこ行ってたんだよ。

妻 …。

夫 どこ行ってたんだよ。

妻 …いろいろ…。コンビニとか、本屋とか、ファミレスとか…

夫 どうするんだよ。何かあったら。ここんどこ物騒なのに…、

妻 結婚して2年。

夫 …？

妻 はじめて会ったのが4年前で、あなたがすぐ福岡へ転勤になって、遠距離の期間が

2年。

夫 …なんだ？

短編集 3

妻 ちようどおんなじ2年。  
夫 なんだよ。  
妻 折り返し地点だ。  
夫 勝手に折り返すな。

間

妻 夢、みた。  
夫 夢？  
妻 さっき。  
夫 どこで？  
妻 ファミレスで寝てたら…  
夫 お前、また…  
妻 うとうとしただけよ。  
夫 つまみだされるぞ。  
妻 出されませんでした。  
夫 そのうちなあ…

妻 夜中だから外は暗くて。真っ暗な中で電話機がもうひとつの電話機を呼んでたの。  
夫 は？  
妻 だから、夢。  
夫 …電話機なの？  
妻 うん。電話機の夢。真っ暗な中で電話機がぶるるる、って遠くの電話機を呼ぶの。もうひとつの電話機はずいぶん遠くにあるもんだから、姿はどこにも見えないんだけど。だけど電話機が遠くから呼ぶと、ちゃんとぶるるるって鳴るの。  
夫 …  
妻 遠くにある2台の電話機が、同じ時間に、違う場所で、おんなじ音で、ぶるるるって鳴るの。

夫 …  
妻 目が覚めた。  
夫 …  
妻 あの音だと思った。  
夫 …  
妻 ずいぶん聞いてない。なかなか見つからなくて…探してたら朝になっちゃった。  
夫 …

妻 でも見つかった。

夫 ?

妻 引越しの時、いろんなもの処分したよね。

あなた冷蔵庫、私のテレビ、あなたの電気湯沸かし器、私のベッド…、

ふたつあったものが、みんなひとつになった。

夫 ふたりとも、一人暮らしたから…。

妻 あなたのテレビ、私の冷蔵庫、あなたのベッド、私の湯沸かし器…

夫 見慣れたものばかり置いたのに、見たことない部屋ができた。

妻 …

夫 遠くの部屋で別々に見てたはずのものがいっぺんに目に入る。変な感じがした。

妻 私のカーテンの前にあなたの本棚がある。

夫 あなたのカーペットの上に私のクッションがある。

妻 私のテレビの横にあなたのビデオがある。

夫 …

妻 電話機もひとつで充分だった。

夫 あ…

妻 ひとつ片づけた。

夫 …

妻 結婚して。いろんなことが一緒にできるようになったけど、ひとつだけ、できなくなっただけがあった。

夫 ?

妻 夜中に、あなたの部屋のベルを鳴らすこと。

夫 …

妻 朝一番にあなたの部屋のベルを鳴らすこと。

夫 …

妻 ベルが鳴るのをじっと待ってること。

夫 …

妻 ……私が、アパートで使ってた電話機。

夫 え?

妻 これ。

夫 …。

妻 そっちは、あなたがアパートで使ってた電話機。

夫 …

妻 つないでみた。……ベル、鳴った?



短編集 3

夫 うん…。なんか音が違うような気がするけど。  
妻 回線がひとつだから、内線しか使えないのよ。  
夫 それはそうだよな…。

間

妻 ごめんなさい。  
夫 え？  
妻 昨日は言い過ぎました。  
夫 いや…。ごめん、…その…  
妻 あんまりおんなじこと言わせるから…何回言ってもきいてくれないから…  
夫 いや…ごめん。わかってる…んだけど…。  
妻 でも「どんな理由があるうとも」夜中に飛び出したりファミリーレストランで寝たりしたのは私が悪かったです。もうしません。ごめんなさい。

しばらく。

夫 腹、減ってない？  
妻 ……減ってる。  
夫 なんか食おうか。  
妻 ……うん。  
夫 米焚いといたから。  
妻 嘘…  
夫 8時に炊けるはず。  
妻 ……え？あ…湯気出てる…。  
夫 じゃあ。もう行くよ。電話切るから。  
妻 え？  
夫 電話…  
妻 行くってどこへ？  
夫 だから、台所。

ふるふる…。遠くからふたつのベルの音。

## 洗濯機

登場するもの：男

女

女 子供の頃。誕生日は特別だった。

ひとつ年をとるたびに、世界はひとまわりずつ大きくなっていったから。

365日のうちの1日がほかのどの日とも違う特別な日で、

それは私にとってだけ特別な日で、

その日が特別な一日だということを、みんながちゃんと覚えていてくれる。

「おめでとう」という言葉とささやかなプレゼント・・・。

だけど世界がどんどん大きくなって、もうそれは以上大きくなれないほどにふくらんでしまっても。

それから後も特別な日は毎年必ずやってきた。

そのころから。

特別な一日は特別な誰かと過ごしたいと思うようになった。いつか特別な恋をしたら、そしてそのひとと結婚したら、1年に2日だけやってくるお互いの特別な日を、

二人で一緒に祝おうと思った。

豪華に食事をしたり、高価なプレゼントを用意したりしなくていい。

おめでとうと小さなケーキがあればいい。そう、思っていた。

・・・だから。誕生日が近づくと憂鬱になる。

いやな予感の中し、結局毎年けんかになる。

彼は私が神経質すぎるという。私は彼がどうしてあんなに無頓着なのかわからない。

どうして当日に平気でほかの予定を入れてしまっ、3ヶ月も経ってから突然プレゼントをくれたりするの。どうして、次の月の給料が出てからお祝いの食事につれてってくれるの。どうして、当日は何にもないように知らん顔してるの。「おめでとう」ってひとこと言ってくればそれでいいのに。

その日の朝、言ってくればそれでいいのに・・・。

今日は6月29日。結婚して7年目の私の誕生日。

今年くらいは特別な何か起きるかもしれない。

そんなことはないか。きっといつもと同じ、孤独な誕生日。

半分、あきらめて、でも半分だけ期待して、仕事を早めに切り上げて帰ってきた。

・・・だから、夕方、大きな荷物が届いたときにはほんとうにびっくりした。

夕方。居間で電話が鳴る。

女 はい。  
男 あ、俺。今仕事終わったから。  
女 あ。  
男 何？  
女 さっき電気屋さんが・・・。  
男 あ？もう届いた？  
女 何？あれ・・・。  
男 プレゼント。  
女 ・・・・。  
男 乾燥機付き洗濯機。音のしないやつ。  
女 夜中に洗濯して、脱水して、乾燥して、朝には全部乾いてるやつ。  
男 え・・・だって・・・。  
女 何で動揺してんの？

女 動揺もするわよ。どうしたの？今年はいったい・・・。  
男 何か不満？  
女 そうじゃなくて・・・びっくりして・・・。  
男 いらない？  
女 ほしかったけど・・・。ものすごく。でも、あんな高いものじゃなくてよかったのに。  
男 これでもずいぶん値切ったんだよ。  
女 値切ったの？！  
男 ああ。展示品処分のをさらに値切って買った。  
女 展示品処分・・・。  
男 でも、へそくり全部なくなった。小遣いも・・・。当分外で飯食えない。  
女 あの・・・。  
男 でも、いいだろ。絶対喜ぶと思って。  
女 ありがとう。うれしい。でも・・・なんか気持ち悪い。  
男 なんて？  
女 だって・・・。

## 短編集 3

女、しばらく考えている。そして。

女 ねえ。晩ごはんどうする？

男 え？

女 何か食べに行かない？

男 お前、ひとの話聞いてる？今の俺にそんな金あると思う？

女 ……私出すよ。

男 そんな金あるならカンパして。こっちはたばこ代にも困ってるんだから。

女 ……。

男 それに今日、昼飯遅かったから、なんか軽いもんでいいや。

女 昨日のカレー残ってない？

女 残ってるけど…

男 じゃ、カレーでいい。

女 ……せめて、ケーキ食べない？私、裏のケーキ屋さんで…

男 ああ、甘いもんはさっき食ったから今日はもういい。

女 なんてケーキまで食べてくるのよ！？

男 なんて怒るんだよ。アルバイトの女の子がアップルパイ焼いてきてくれて、会社の人などで食った。すごい良かった。大きいの2切れ食っちゃった。

女 ……信じられない。

男 林檎アレルギーのやつがいたんだよ。残したら悪いじゃないか。

女 そういふ問題じゃないでしょ。

男 何なんだよ。なんで俺が怒られなくちゃいけないんだよ。

女、しばらく黙っている。

女 ……これならで文句ないだろ、て思ってるわけ？

男 は？

女 誰も高いもの無理して買ってなんて言ってるわいよ。

男 それで満足すると思われたの？私。

女 ……何で怒ってるの？

男 どうして洗濯機なのよ…。

女 おまえが毎朝会社行く前に洗濯してるからだよ。

男 え？

女 うちの洗濯機は古くてうるさいから夜中に洗濯できないって。

女 . . . . .

男 ふたりとも最近帰り遅いし、おまえはなんだか疲れてるし。  
帰ってきて洗濯物放り込んで朝まで放っておけば、朝くらいはゆっくり寝てら  
れんのかなと思って。

女 . . . . .

男 それに、洗濯物干してたり取り入れたりする作業ってなんか非生産的な感じがし  
てき、納得いかないんだよ俺。干さなきゃ取り入れなくていいわけだろ。だから、乾  
燥機についてるのにした。

女 . . . . . 高かったでしょう。

男 あんなに高いと思わなくて。手頃な探してたんだけどなかなかみつからなくて。  
女 . . . . .

男 今日やっと思えた。そしたらおまえは怒ってる。

問

女 . . . 何で、今日、買ってくれたの？

男 昨日でセールが終わったから、展示品の処分であかったんだ。

女 なんとか手の届く値段になったんで . . . .

男 それだけ？

女 え？

女 今日、私に洗濯機を買ってくれた理由はそれだけ？

男 うん。そうだけど。なんで？

女 . . . . . いい。ありがとう。どうもありがとう。洗濯機 . . . あり  
がとう。

男 機嫌直った？わけのわかんないことで怒るなよ。じゃ、帰るから。カレーよろし  
く。

がちゃ。

女 受話器を置いて。  
彼が帰ってくるまでの間。何をしようかと考えた。  
外出の準備はしなくていい。  
夕食の支度もしなくていい。  
ケーキも買いに行かなくていい。  
家中の洗濯物を集めて、洗濯機に放り込んだ。

彼の言うとおり。

最新式の乾燥機付き洗濯機は、扉を閉めると静かに、音も立てずに回り始めた。

拍子抜けするほど静かに、きれいに汚れが落ちていく……。

このまま放っておけば朝までにすっかりきれいに乾いている。

明日から少しゆっくりに眠れる。

いったい私は今、うれしいのか悲しいのか……？

今日は何の日だったっけ？

……我が家の洗濯機を買い換えた日。

うん。世界はまだ、大きくなる余地がある。

音も立てず。洗濯機は静かに回っている。

かくれんぼ

登場するもの：男

女

分婉室

男はおろおろしながら女の手を握っている

女は痛みに半分意識が薄れ息は荒く時折うわごとを呟いている

男 おい。大丈夫か？

女 うーん。

男 おい

女 うーん。

男 がんばれ。な、がんばれよ。な。

女 うん……。

男 もうちょっとだから。な。がんばれよ。

女 うん……。

男 なあ。おい。おい。

女 ……ねえ。  
 男 ん？何？どうした？  
 女 あたし…。  
 男 え？  
 女 あたし…。  
 男 え？何？  
 女 あたしは……。  
 男 なんだよ。  
 女 あたしは…。どっち？  
 男 はあ？  
 女 どっちなんだろ…。  
 男 どっちって…何が？  
 女 あたし…  
 男 おい。おい。  
 女 うーん。

遠くで子供の声

「もーいーかい」「まーだだよ」  
 「もーいーかい」「まーだだよ」

女

目を閉じている間に、あの子は遠くへ走っていった。  
 鬼になった私は、あの子を探して遠くまで歩いた。  
 知らない道を遠くまで歩いた。  
 知らない家の塀の影、知らない公園の滑り台、知らないビルの自転車置き場。  
 初めて行った新しい場所で、私は必ずあの子を見つけた。  
 初めての場所が一つずつ、知っている場所が変わっていった。  
 遠くはどんどん遠くなり、わたしとあの子の間はどんどん広がっていった。  
 あの子が目を閉じている間に、私は出来るだけ遠くまで走った。  
 鬼になったあの子は私を探して遠くまで歩いた。  
 知らない道を遠くまで歩いた。  
 初めて行った新しい場所で、あの子は必ず私を見つけた。  
 初めての場所が一つずつ、周りから減っていった。  
 遠くはどんどん遠くなり、あの子と私の間はどんどん広がっていった。  
 目を開けるとその度に、少しずつ何かが変わっていった。

短編集 3

空気は少しずつ冷たくなり、影は少しずつ長くなり、日の光は少しずつぼにやりと薄れていった。遠くはどんどん遠くなり、やがて見えないくらい遠くなり、聞こえないくらい遠くなり、  
…いつのまにか、図ることの出来ない大ききさになってしまっていた。あの子はいったい、どこまで歩いていったんだろう。

男 ほん。がんばれよ。な。  
女 うん……。  
男 もうちよつとだよ。きつと。な。  
女 うん……。  
男 なあ。  
女 ……どこまで行ったんだろう。  
男 え？  
女 遠すぎて。もう見えない。  
男 何？なんだったって？

女 でも……  
男 おい、しっかりしろよ。おい。

遠くで子供の声  
「もーいーかい」「まーだだよ」  
「もーいーかい」「まーだだよ」

女 あの遊びは、いつどうやって終わったんだろう？  
女 私はあの子に、いつさようならを言ったんだろう。  
…さよならを言った覚えがない。  
女 始まったものは終わるまで続いているはずだから。  
女 私たちは、まだあの中にいるんだろうか…。  
女 目を開けたら、私はどこにいるんだろう。  
女 あの子はどこにいるんだろう。  
女 目を開けて。鬼は探しに行かなくちゃ。  
女 どこまでも。どこまでも。どこまでも。  
女 新しくはじめて見るあの場所へ…。  
女 どこまでも遠くへ。



いつも必ず見つかった、あの時のあの場所へ…。

男 おい。しっかりしろよ。なあ。

女 うん……。

男 俺、ここにいろよ。

女 うん……。

男 な。

女 ……一緒に…。

男 え？

女 一緒に遊ぼう。

男 え……？

女 うーん。

男 うん。一緒にいろよ。な。大丈夫だよ。

女 うーん。

男 おい、しっかりしろよ。おい。

女 肝心なことを思い出せない。

最後に隠れたのはどっちだったんだろう…。

目を開けるのは私？それともあの子？

探しに行くのは私？それともあの子？

隠れてるのが私？探し出すのが私？見つけられるのが私？

遠くにいるのが私？遠くへ行くのが私？

私は今どこにいる？

そして今から何処へ行く？

女 遠くへ。遠くへ。まだ見たことのないその場所へ。

女 これまでのどこよりも遠く、どこよりも新しい、初めての場所へ。

女 見つけるのはどっち？

女 見つかるのはどっち？

女 私は、今どこにいるの？

女 あの子は…。



# 月食

登場するもの：男

女

女 花火の季節は終わった。中秋の名月にはまだ早い。  
9月のはじめの夜の空はどうにも中途半端で、たいくつだ。  
夜の風は肌にちようど気持ちいい温度なんだけど  
日中が前ほど暑くなくなったからか、  
そんなに感動するほど「涼しい」わけでもない。  
夏休みも終わってしまった。でかけるあてもお金もない。  
それでも週末はとりあえず毎週やってくる。

外からは虫の声。時折風に吹かれて風鈴がなる。  
男はたばこを片手に、ベランダの縁に腰かけている。

男 女  
なにしてるの？  
え？

女 蚊がすごいじゃない。うわ：  
男 そう？  
女 ：閉めてよ。網戸！  
男 ああ・・・。うん・・・。  
女 何みてんの？  
男 月。  
女 月ー？  
男 うん。  
女 月・・・？（空を探す）  
男 ・。  
女 真っ暗じゃない。  
男 うん。（得意そうに）  
女 何見てんの？  
男 月。  
女 ・・・・？  
男 月食。  
女 月食？

短編集 3

男 知らない？今夜、皆既月食なんだよ。  
女 ……ふうん。

女、一緒に空を見る

女 ……何みてんの？

男 だから、月食。

女 こんな真っ暗なのに？

男 皆既月食だから。

女 ……

男 全部隠れるんだ。

女 ……

男 なかなかないんだよ。そういうのは。

女 ……

男 な、ほんとに真っ暗だろ。

女 ……うん。暗い。

男 な。ほんとに何も見えないだろ。

女 ……うん。見えない。

男 ……

女 ……

ふたり、並んで月食を見る。

女 ねえ。

男 何？

女 よく見るの？

男 うん？

女 月食。

男 今日みたいなのはふつうは見られない。

女 ふつうに見られる方のはよく見るの？

男 自慢じゃないけど、小学生のときから欠かさず見てる。

女 知らなかった。

男 そう？

女 実は天文マニアなの？

短編集 3

男 月食マニアかな。ほかの星は興味ない。  
女 ふうん。  
男 なんかさ、大きな天体の動きが肉眼で確かめられるって、わくわくしない？宇宙の神秘を感じませんか？  
女 そうかなあ。  
男 わかんないかなあ。  
女 いつ終わるの？  
男 明日の朝。  
女 朝まで見てるの？！  
男 うん。  
女 ここで？蚊が入るのに？  
男 ……蚊?????!?! (嫌な顔をする)

間

男 男 …今夜こそ、最後まで見るんだ。

男 欠けるとどこか戻るところか、いつもどっちか見損ねるんだよ。  
男 ……ふうん。  
男 今夜は皆既月食だ。完全に消えて完全にもとに戻るまで、絶対に見届けてやる。  
男 これまでの無念を一気にはらすんだ。  
男 ……はあ？

女 てこでもうごきそうにないので、私も横に並んで、  
真っ暗な空をベランダからふたりで眺めた。  
月はなかなかもとの形にならなかった。  
夜はだんだん更けていく。  
なんだか。  
何をしているのか、だんだんわからなくなってきた。  
このひとにはわかってるんだろうかと、隣を見ると、  
彼は隣でうとうとしていた。  
この時間が永遠に続くような気がした。  
いつまでも、空は闇に包まれたままで、  
見るものもない広いだけの空をもてあましながら

たいくつに耐えきれずに眠り込んでしまうような気がした。  
ほんとうは、闇の向こう側で空はきちんと言画を遂行しているのに。  
この平凡で退屈な闇の前で。  
ほんとうのことはとても不思議でおかしなことに思えた。

月はさっきまでたしかに丸かったし、これからまた、たしかに元通り丸くなるのに。

虫の声。風鈴の音。

## 水族館

登場するもの：父

娘

父 海から遠く、離れることに決めました。

大きな町を作る場所は海から遠く離れたところがいいのです。

海から遠く離れたところに。

大きな立派な町ができあがりました。

けれども新しい町は油断するとすぐに空っぽになってしまいました。

みんな海が恋しくて、こっそり海へ帰ってきてしまうからです。

これでは町ができません。

新しい町の町長さんは考えました。

そして、いいことを思いつきました。

大きな入れ物を作って、海を少し持っていくことにしたのです。  
大きな入れ物が町の真ん中におかれ、町の人の人数分だけ海が注がれました。

それでも。大きな海の入れ物はいくらもありませんでした。気持ちがいそいそでないのです。みんな気恥ずかしくなるのです。海から遠く離れて来たのに町の真ん中に「海」を飾っておくなんて、なんだかとてもみっともないことなのよ。気がしたのです。町長さんはいくらも考えました。そして、いいことを思いつきました。

ここは町なのだから。「海」にも、住人を募集すればいいじゃないか。

魚たちに頼んでみました。

海藻たちに頼んでみました。

海辺の動物たちに頼んでみました。

こうして、町の真ん中に、魚たちの暮らす小さな「海」ができあがりました。町は空っぽにならなくなりました。みんな魚に会うのを口実に、「海」を見に行くようになったからです。

日曜日の昼下がり。

娘 …おしまい？  
父 おしまい。  
娘 …ふうん。  
父 どうした？  
娘 それって、昔話？  
父 そうだよ。  
娘 ほんとの話？  
父 ほんとの話。おとうさんのおとうさんのおとうさんが、そのお父さんから聞いた話。  
娘 …だから、日曜日になるとみんな水族館へ来るの？  
父 そうだよ。  
娘 だから、今日もこんなに混んでるの？  
父 うん。  
娘 あたしたちじゃなくて、みんな海を見にくるのね。  
父 そう。そして私たちがそれを手伝う。

娘 なんか、かっこいいよね。  
父 かっこいいだろ。  
娘 ……おじいちゃんも、そう言ったの？  
父 ……  
娘 蛸のプライドだね。  
父 ……  
娘 ねえ。おとうさん。  
父 うん？  
娘 あたしも、海が見てみたい。  
父 ……  
娘 あたしたちが海を見たいと思ったら、どうすればいいんだろうね。  
父 ……うーん…  
娘 ああ。おとうさん。うしろむいちゃだめだよ。ほら、子供がこっちみてる…。

## 鳩 B

登場するもの：私  
彼

私 私は手品師だった。  
日曜日になると公園へ行き、みんなの目の前で帽子を開けて鳩を出して見せた。  
誰もが鳩を見て、大きな拍手をした。  
私はにっこり笑ってお辞儀をした。  
とても誇らしかった。  
そして、なぜだかいつも、取り残されたように、無性に寂しかった。  
彼はいつもいちばん前で、目をまるくしてそれを見ていた。  
いつも。毎週。何回も。  
何度おなじことが繰り返されても、  
いつも心底不思議そうに、わくわくした目で見つめていた。  
私にはそれがとても不思議だった。



短編集 3

だから、あの日の夕方。公園の近くの川原で彼にばったり出くわしたとき、  
思いきって、私の方から話しかけてみたのだった……。

\*\*\*\*\*

私 ねえ。あなた、いつも公園に来てる？

彼 ……うん。

私 彼はまるで帽子から出てくる鳩を見るように、驚いて私を見た。

私 知ってるわ。いつもいちばん前で見てるでしょ。

彼 ……

私 手品が好きなの？

彼 ……うん。特に帽子から鳩を出すやつが。

私 そう……。

私 なんだかどきどきした。

私 ……あれはね、いちばん難しいの。

彼 ……そうだろうね。

私 ……ど、どうして？

彼 だって、仕掛けが全然わからないもの。

私 ……仕掛けなんかないわよ！仕掛けのない手品がいちばん難しいのよ。

彼 そんなのおかしいよ。

私 なにがおかしいの？

彼 仕掛けのない手品なんて……、

私 ずいぶん練習したの。それでもなかなかできなかったの。

私 ……できるようになるまでに、ずいぶん時間がかかったの。

彼 ……

私 何度も何度も練習したのよ。それでもなかなかできるようにならなかったの。

私 ねえ、それってどういうことだかわかる？

彼 ……わからない。

私 帽子を開けるたびに、そこにいるはずの鳩がそこにいないっていうことなのよ。

彼 ……でも、僕は見たよ。君はいつも大きな白い鳩を帽子からさっと取りだし

て、人差し指の上に乗せて……。鳩は白い羽を広げて……。

私 ……できるようになったの！

彼 ……

## 短編集 3

私 だからもう失敗したりしないの！  
あなたがいとも公園で見ているように、いつでもちゃんと鳩を出すことができ

る。

私 ．．．  
できるようになったの。

私 帽子を開けるたびに、どきどきしながら目を開けることなんかないのよ。

私 ．．．．．  
ちゃんと出てきた鳩を見てどきどきすることも。

彼は、とても困った顔をして、私の話を聞いていた。

私 ．．．．．  
そして、言った。

私 彼は、どこにいっちゃったんだろうね。

私 ．．．．．

私 彼はとても困った顔をして、不思議そうに、私の顔を見ていた。

私 私は、それ以上もう何も言えなかった。

私 突然、強い風が吹いてきた。

ぶかぶかの帽子はあっという間に吹き飛ばされて、川の面を滑っていった。  
帽子が川下へ運ばれていくのを、私も彼も、黙って見ていた。

大きな夕日が川の面でゆらゆらと揺れていた。

そっちのほうはいつまでも流されることなく同じ場所にとどまっていた。

その日を最後に。私は公園で手品師をするのをやめた。

\*\*\*\*\*

私 にもかかわらず。

手品をしていた私と手品を見ていた彼にとって、

あの日はおしまいの日ではなく、長い時間の始まりの日になった。

私はもう二度と、公園で手品をしなかった。

代わりにもっと別の、いろんなことをやった。

できるようになるのに長い時間かかることもあったけれど、

それでもいつしかできるようになってしまった。  
そして、そのたびにひとつずつ何かをなくした。  
彼はいつも不思議そうにそれを眺めていた。  
帽子から出てくる鳩を見ていたときとまるでおなじ目をして、  
おなじように眺めていた。  
私はそれを見ると、まず、いらいらして、そして羨ましいと思った。  
それからとても安らかな、幸せな気持ちになった。  
私がなくしてしまったものは、振り返るといつも、  
彼の見ている世界のなかにぽつんと残されていた。  
それを見失いさえしなければ大丈夫なのだった。

あのたぐさんの鳩たちがどこへ行ってしまったのか・・・  
もしかしたら彼は知ってるのかもしれない、と思うことがある。

あのとき私がなくしてしまったのは、消えてしまった方の鳩ではなくて、  
帽子から出てくるようになった方の鳩だったのかもしれない。

短編集 3 鳩

二〇一六年一月七日初版第一刷行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com

※上演に関するお問い合わせは右記まで。